

1950年代の黒羽清隆

— 国民的歴史学運動から中学教師へ —

八耳 文之

はじめに

黒羽清隆については、筆者はこれまで『歴史教育史研究』に『史料を中心とした中学生の歴史』¹と『新講日本史』²、黒羽の著作（学習参考書）を史料研究で検討してきた。黒羽の著作は、生涯を通じて「24冊」³に及び、これまでの分析は、黒羽の業績の一端に触れるにとどまっている⁴。

黒羽の歴史教育者としての歩み⁵は、東京教育大学で、国民的歴史学運動⁶に参加し、大学卒業後、1956年東京（新宿）の中学教師に赴任から始まる⁷。8年間の中学教師生活を経て、高校教師を10年間務め、さらに大学教師になり、8年余りの大学教師生活の道半ばで1987年急逝した。

黒羽の業績は、各学校（中高大）での教育実践や24冊にも及ぶ著作にとどまらない。1960年前後に同人誌『べらんめえ』に連載したエッセイ、1962年から始まる東京都成人学校の受講生たちの歴史を学ぶクリオの会の講師（～1987年）、1970年からは

¹ 八耳文之「家永三郎・黒羽清隆『史料を中心とした中学生の歴史』（1959年）の検討—十五年戦争期を中心に」『歴史教育史研究』第13号（2015年）。

² 八耳文之「家永三郎・黒羽清隆共著『新講日本史』（1967年）について」『歴史教育史研究』第17号（2019年）。

³ 黒羽清隆『鉄砲足軽ひとりごと抄—黒羽清隆講演・座談集』地歴社、1987年、244頁。

⁴ 八耳文之「歴史教育と民俗学—黒羽清隆の教材論に学ぶ」『歴史地理教育』896号（2019年7月）、「黒羽清隆『増補版 日本史教育の理論と方法』—今、読みたい歴史教育・社会科教育の“古典”」『歴史地理教育』920号（2021年2月）。

⁵ 黒羽清隆「歴史教育における私のあゆみ」『歴史評論』385号（1982年5月）は、中学・高校での自らの実践を振り返っているが、年を追ってたどっているわけではない（『歴史教育と教科書問題』地歴社、1983年）。

⁶ 近年、国民的歴史学運動の再評価を主張する高田雅士がその著作の1章をあてて、加藤文三の実践を検討している（高田雅士『戦後日本の文化運動と歴史叙述—地域のなかの国民的歴史学運動』小さ子社、2022年）。

⁷ 加藤文三や本多公栄も国民的歴史学運動に参加し、加藤は黒羽より3年早く、本多は同じ年に東京の中学教師になった。

⁸ 黒羽の著作目録参照（加藤正彦・八耳文之編『黒羽清隆歴史教育論集—子どもとともに歴史を学び、歴史をつくる』竹林館、2010年）。

NHK通信高校講座の講師（～1980年）や教科書（小中高）・指導書・資料集の編集・執筆、1980年代には、学習マンガの原案作成や学習教材パネル日本史の監修、自治体史や地元藤枝の教師との資料集づくりなど、多岐にわたる。学校教育だけでなく、社会人教育、テレビ、マンガ、このような歴史教育者・研究者はほかにはいない。

本稿は、黒羽清隆の歴史教育者としてのライフヒストリーに焦点をあて、まず1950年代の黒羽清隆の実践（学生時代も含む）について分析する⁹。1950年代にしぼったのは、筆者の能力不足もあるが、消極的な意味だけではなく、近年では、「1950年代」¹⁰に注目が集まっている。1950年代の黒羽は、前述したように、国民的歴史学運動に参加し、中学教師になってから、20代前半という若い年齢でありながら、学習参考書を執筆するなど、刮目すべき実践は、年代を限っても独自の検討にあたいする。ここで分析対象とするのは、黒羽の著作目録（注8）にあがっている著作だけではなく、その後入手した著作¹¹（ガリ版印刷を含む）や、生徒会誌、クラス新聞、教え子からの聞き取り・書簡、さらに黒羽との会話の記録も含む。なお文末に、黒羽が作成したガリ版印刷の執筆目録（1950年代）を補訂してあげた。

I. 大学入学までの歩み

黒羽が生まれてから大学入学までの歩みは、『日本史への招待』第3章「歴史を見る目の形成」¹²に活写されている。それによりながら、簡潔にスケッチする。

黒羽は、1934年2月25日、東京の杉並区阿佐ヶ谷で「株屋」の長男として生まれた（ちなみに明仁上皇と同学年である）。日本大学附属幼稚園の2年保育を経て¹³、1940年杉並区立第五尋常小学校（以下、杉五と略称）に入学した。入学の翌1941年4月小学校は国民学校になり、12月アジア・太平洋戦争が開始され、杉五は野瀬寛顕校長の下で徹底した「戦争教育」がおこなわれた¹⁴。1942年8月、黒羽は父親を病気で失う。

⁹ これまでの黒羽を取り上げた論考は、「戦争史の学習をどうすすめるか」『歴史地理教育』49号（1960年2月）（『日本史教育の理論と方法』地歴社、1972年、収録）にふれるだけで、1950年代の黒羽の実践をトータルに検討した研究はない。

¹⁰ たとえば、鳥羽耕史『1950年代—「記録」の時代』河出書房、2010年。

¹¹ 国会図書館デジタルコレクションで、和歌森太郎監修『中学2年社会の学習』（学生社、1958年）を閲覧できた（黒羽の手元にもなかった）。

¹² 黒羽清隆『日本史への招待』大和出版、1974年、203～239頁。この書からの引用は、いちいち注記しない。

¹³ 卒園アルバムに黒羽の描いた戦車隊の絵が掲載された（黒羽清隆『太平洋戦争の歴史』講談社学術文庫、2004年（初出は1985年）、241頁図版参照）。

¹⁴ 前掲『太平洋戦争の歴史』第7章「子どもたちの六年間—「自分史」としての戦争」233～262頁

「父の死—苦難の始まり」である。私立の幼稚園に通うなどの経済的に不自由のない生活から一転する。さらに1944年8月、長野県小県郡別所温泉に集団疎開する¹⁵。幼少期での父の死と学童疎開体験は、黒羽の人間観や歴史観に決定的な影響を与えた。この学童疎開中に、兵士として別所温泉に来ていた中野重治¹⁶と出会った、というより中野の目に留まった¹⁷。

敗戦後も、黒羽は苦難の生活から解放されなかった¹⁸。学童疎開からひとあし早く東京に帰され、その荒廃をまのあたりにする。1946年3月、杉五を卒業、通知表には、「地理歴史が優秀」と記されていた。4月、都立武蔵中学校に入学した。自宅から学校までは徒歩で50分もかかり、学校よりも「闇市」に吸い寄せられた。間借りしていた「華僑」の下働きの仕事をして、警察に追いかけられたこともあった。アメヤ横丁で仕入れた駄菓子を買って、正月の餅にもことかくような貧しい家計をたすけた。当然学校生活から遠ざかり、成績も下位に低迷し、「大化の改新について書け」という社会科の歴史のテストに1行も書けないことがあった。黒羽にとって幸運だったことは、中学から高校へ無試験で進学（都立武蔵丘高校）できたことである。

高校に入学するころから、ある友人の家にたびたび出入りするようになる。この友人の母親から大いに知的刺激を受け、友人たちと談論風発する。巨大な森鷗外に食いついた。文学青年への道は、この友人の母親に強く規定され、いきなりスバル流の明治晩期から歩みだされた。映画論にも花を咲かせ、新宿の日活名画座は、『私たちの学校』であった¹⁹。

日本史との出会いは、世界史を丸山保²⁰に教わったことがきっかけである²¹。絲屋寿

参照。学童疎開体験についても詳述されている。黒羽も編集にかかわった『天沼・杉五物がたり』（1976年）も参照。

¹⁵ 苦しい学童疎開生活に耐えかねて、脱走を図る。黒羽は「参謀」としてかわり。失敗して、教師から「往復ビンタ」の制裁を受ける。

¹⁶ 黒羽は終生、中野を敬愛した。学生時代に、中野に手紙を送り、返事（1954年2月5日付消印）をもらったことがある。

¹⁷ 中野はこの体験をもとに「米配給所は残るか」という短編小説を発表し、読んだ黒羽は「涙をおさえかねた」（前掲『日本史への招待』228頁）。

¹⁸ 敗戦後も学童疎開生活は続き、栄養失調におちいり、食べ物を集団で盗んだだけでなく、個人で盗んだことも告白している。

¹⁹ 黒羽は、1950年代後半から60年代初めにかけて、年間三百から四百本の映画を見ていた（前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD参照）。

²⁰ 黒羽は、丸山に花田清輝『復興期の精神』（1946年）を教えられ、大学入学後に熱烈な読者になる（前掲『歴史教育と教科書問題』185頁）。

²¹ 学校図書委員長に選ばれ、読書好きに火が付き、堀辰雄『風立ちぬ』にとらえられた。

雄『幸徳秋水伝』²²を読んで、大逆事件を知り²³、中野重治詩集にうちのめされる一方、E. H. ノーマン『日本における近代国家の成立』²⁴を読み、「西欧的知性が日本近代史をどう裁断するかを学んだ」。丸山が顧問の歴史部で、文化祭に堅穴住居をつくった。丸山に国公立大学²⁵で日本史を専攻するにはどこがいいかとたずねて、東京教育大学と家永三郎の名を教えられた。秋から入試勉強に取り組み、翌年2月の初め、みんなと遊んだ後、友人の母親から「もう、きてはダメ」と言い渡され、一所懸命勉強し、その結果、東京教育大学に無事合格できた。

II. 東京教育大学に入学して

(1) 国民的歴史学運動に参加―「母の歴史」をつくる

黒羽に国民的歴史学運動をうたった詩がある。「傘の歌」²⁶である。紹介する。

傘の歌

一あるいは国民的歴史学運動の情念について

降りしぶく街にでるとき/君たちむすめら/あかるい傘をさしてゆけ
男たちは

つめたい黒い傘をさしてあるき　それが雨の日の街を憂鬱に思わせる
君たち/あふれ咲く花花の傘をさして/きりりと/鋭角的に
君たちのからだは/いつも/いっばいの憂いと気遣いにみちていようが
しかも瞳は高きをみあげ　あかるい傘をくるくるとまわしてゆけ
そのとき　われら若者は/鋭い眼ざしではるかな時間をみつめはじめ/やがて
いっばいにさすであろう日射しのためによるこびの歌歌を準備する
降りしぶく街にでるとき/君たちむすめら/あかるい傘をさしてゆけ
あじさいの花/くちなしの花/タンポポの花/つゆくさの花

²² 絲屋寿雄『幸徳秋水伝』三一書房、1950年。

²³ 黒羽が作成した前述の執筆目録によると、「一思想家の生涯（幸徳秋水小伝）」（都立武蔵丘高校生徒会誌『武蔵丘』）で「校長より表彰を受くる」とあるが、武蔵丘高校に問い合わせたところ、この時期の『武蔵丘』は所蔵していなかった。

²⁴ E. H. ノーマン（大窪愿二訳）『日本における近代国家の成立』時事通信社、1947年（現・岩波文庫）。

²⁵ 当初、早稲田大学を目指していたが、金銭上から私立大学は無理と断念した。

²⁶ 日日授業実演会『いまはけものたちのねむりのとき―黒羽清隆詩集』湯川書房、1987年。この詩は、1955年9月13日につくられた。

暗いおもしろ傘ばかりの群のなかを花の匂いがする傘をさしてゆけ/君たち
そしてそののびやかにはやい足どりで
黒い傘をさしてあるかねばならぬ男たちの渴いた胸に
熱いランプをともしやれ

黒羽の没後、加藤正彦によって編まれた黒羽の詩集『いまはけものたちのねむりのとき』に収録されている詩のなかで、社会運動を詠んだ詩は、この「傘の歌」のほかはない。当時、黒羽ら東京教育大学学生（男たち）の東京教育大学歴史学研究会と厚生省職員²⁷（むすめたち）のサークル木曜会²⁸が、歴史をとともに学び、「母の歴史」という30メートルに及ぶ絵物語を作り上げた²⁹。民主主義科学者協会歴史部会の「村の歴史」「工場の歴史」³⁰「母の歴史」を書こう³¹とのよびかけにこたえた作品で、国民的歴史学運動の重要な成果³²の一つであった。この自分たちの取り組みをうたった詩が「傘の歌」である。「つめたい黒い傘」「暗いおもしろ傘」の「男たち」と対比させて、「あかるい傘」「花の匂いがする傘」の「むすめたち」を称揚している。

黒羽が東京教育大学に入学したのは、1952年4月、入学直後に日本はようやく主権を回復したが、メーデー事件が起こるなど社会は騒然としていた。朝鮮戦争は続いており、日本共産党は主流派の指導の下、山村工作隊、火炎瓶闘争など武装闘争を推進していた。共産党とかかわりが深かった民科歴史部会が国民的歴史学運動をよびかけたのはこの年である。加藤文三ら都立大学歴史学研究会が埼玉県秩父に入って、「石間をわるしぶき」³³を発表して、注目をあつめた。黒羽が、教育大歴史学研究会で熱心に活動するようになるのは、その翌年の1953年、大学2年になってからである³⁴。黒羽

²⁷ 本省ではなく、文京区駕籠町にあった厚生省大臣官房所属統計調査部の職員である（前掲『歴史教育と教科書問題』）。

²⁸ 木曜の昼休みに日本の歴史を学んだことから、木曜会と名付けられた。

²⁹ 厚生省木曜会・教育大歴史学研究会「“母の歴史”をつくる中で」『歴史評論』57号（1954年7月）。教育大は東京教育大、これを執筆したのは、黒羽である（池ヶ谷真仁編『歴史を楽しむこと、歴史に参加すること—黒羽清隆 日本史入門講座』明石書店、2005年、135頁）。

³⁰ 石母田正『歴史と民族の発見』東大出版会、1952年。国民的歴史学運動に参加した学生たちにとって、この書は「バイブルのような役割」をはたした。

³¹ ふるかわ・おさむ「母の歴史」を書こう『歴史評論』45号（1953年5月）。

³² 「日本の史学史上の一大金字塔記念碑」（林基）とまで評価された（『歴史評論』62号、5頁、1955年1月）。もちろんこの主観主義的評価は、のちに厳しく批判されることになる。

³³ 都立大学歴史学研究会「石間をわるしぶき」『歴史評論』40号（1952年11月）（加藤文三『石間をわるしぶき—国民的歴史学と歴史教育』地歴社、1973年に収録）。

³⁴ 1952年、大学1年のときに、教育大学自治会がおこなった「草刈りバイト闘争」に参加して、大

最後の10代の年である。黒羽は、木曜会の歴史の学習会³⁵にチューターとしてかかわった。この経験をのちに「歴史教育の原点」とふりかえっている³⁶。

この黒羽が製作に参加した「母の歴史」については、同時代では、民科婦人研究部会の井出文子³⁷が、近年は、大串潤児³⁸、倉敷伸子³⁹、喜安朗⁴⁰、山本和重⁴¹、そして当時『歴史評論』編集部⁴²にいた竹村民郎⁴³らが論じている。黒羽ものち(1981年)に「私が現在、日本の近現代史をやっていること、その私の日本近現代史の考え方の中に、おそらくスズメ百までであり、三つ子の魂であって、原点という形で生きている」と語る⁴⁴ように、「母の歴史」づくりの経験は、黒羽の歴史観・歴史教育観の土台となった。

この「母の歴史」づくりの経過は前述の「“母の歴史”をつくる中で」⁴⁵に詳述されているので、これによりながら見ていく⁴⁶。「母の歴史」は厚生省の歴史を学ぶサークルである木曜会の人たちによって、つくられた。1953年9月、来月(10月)にせまっ

学会計課からアルバイト代を出させている(前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD参照)。

³⁵ 「座談会 職場歴史サークルの集い」『歴史評論』58号(1954年8月)によると、テキストは、石母田正ら『世界の歴史4 日本』毎日新聞社、1949年であった。

³⁶ 昼食後の眠気に襲われる義務教育しか受けていない女子職員たちに、眠らせずに30分でぴったり終わって、歴史の話をわからせなければならなかった(前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD)。この経験が、中学教師になって生きてくる。

³⁷ 井出文子「『母の歴史』をどうすすめるか—民科婦人部会から歴史部会へ」『歴史評論』63号(1955年2月)。民科婦人部会と「母の歴史」にかかわった木曜会・教育大歴研との研究会をふまえて書かれている。

³⁸ 大串潤児「国民的歴史学運動の思想・序説」『歴史評論』613号(2001年5月)。

³⁹ 倉敷伸子「女性史研究とオーラルヒストリー」『大原社会問題研究所雑誌』588号(2007年11月)。

⁴⁰ 喜安朗「網野善彦における絶対自由の精神—境界領域を踏破する歴史学」『転成する歴史家たちの軌跡』せりか書房、2014年。

⁴¹ 山本和重「20世紀人文学的方法的再検討のための試論—歴史家黒羽清隆をてがかりとして」『文明=Civilization』第21号、2016年。

⁴² 竹村は1953年、『歴史評論』編集部員となった(「職場の歴史」を考える」大塚英志編『運動としての大衆文化』水声社、2021年。444頁)。

⁴³ 竹村民郎「検証「国民のための歴史学」運動」『竹村民郎著作集V リベラリズムの経済構造』三元社、2015年。

⁴⁴ 「日記・伝記から読む日本近代史」、前掲『歴史を楽しむこと、歴史に参加すること—黒羽清隆日本史入門講座』、153頁。

⁴⁵ 前掲「“母の歴史”をつくる中で」よりの引用はいちいち注記しない。

⁴⁶ この「母の歴史」は取り上げられることはあっても、取り組みの経過や内容についてまで言及した論考はほとんどないので、ここではやや詳しくふれる。

た職場の文化祭で、何をするか話題となり、「講師をよんで話をきくよりも私たちがなにかつくりましょう」と厚生省側からの意見が出ると「賛成」の声が相次ぎ、教育大学生が「母の歴史」を提案する⁴⁷。読書会で、男の人の仕事が妻や母の犠牲の上に立っていることが話題となっていたこともあり、みんながとびついた。「母の歴史」は、教育大学生が提案したものだが、一方的に押し付けたのではなく、文化祭の中心となる木曜会の人たちと話し合っ、みんなで決めたことがわかる。この「母の歴史」は、文化祭に来た人に見てもらうために、模造紙に文章を書くだけでなく、新聞・雑誌などの資料を集めて切り貼りし、さらにみずから絵を描く絵巻物（絵物語）⁴⁸としての作品の展示になった。

プランがつくれ、みんなの母親にアンケートを出すことが決まった。14項目のアンケートがつくられた。☆結婚迄何をしておられたのですか（農業の場合は1日の生活。勤めの場合は生理日の事、職種、仕事を詳しく） ☆結婚についての思い出（どの様にして夫と知り合ったか、見合い、恋愛、強制） ☆夫の職業（共稼ぎの場合は、結婚後も（子供が生まれても）仕事を続けられたか） ☆結婚生活の思い出（楽しかったこと、苦しかったこと） ☆姑のこと（よかったこと、いやだったことを具体的に） ☆戦争のことについて イ、辛かったこと、苦しかったこと、困ったこと ロ、夫や子供の出征、空襲、防空演習、疎開、思い出を具体的に 等々。

アンケートにかかれたさまざまのお母さんとさまざまのお母さんの生活をもとにして、誰々という特殊な母でなく、日本の母ともいうべき誰の母にも共通する、しかも、個性をもった母『おとよ』を作りました。

更に『おとよ』の生まれたという一九〇〇年（明治三十三年）⁴⁹前後から現在に至るまでの日本の政治、社会、国民生活等の状態を詳しく調べ、その上で日本の母「おとよ」さんがどのような苦しい生活をどのように生き貫いて来たかというストーリーを作りました。

「製作日記」には、「母の歴史」にかかわった厚生省の職員の率直な発言が記されている。「どんなものが出来るのか楽しみねー私達にできるかしら」。50枚もギッシリと

⁴⁷ 前述のように、『歴史評論』が「母の歴史」を書こうとよびかけた「ふるかわ・おさむ」の論稿を掲載したことが刺激となった。

⁴⁸ 国民的歴史学運動の中で「祇園祭」（京都）「土の唄」（奈良）のような紙芝居がつくられた。文章だけでなく絵で表現する点では共通しているが、「母の歴史」のような長大な絵巻物はほかにはない。

⁴⁹ 推測だが、1901年生まれ（昭和天皇）が意識されていたのではないかと推測される。

つまったアンケートが集まる⁵⁰。「こうなるとどうしても作らなければっていう気になるわね」。調査の結果、農家の出身が圧倒的、女中経験も多い、結婚当初は楽しかった、戦争はいや、誰もが買い出しと疎開がつかつたと書いている。姑の問題は予想に反してあまり書かれていなかった。

ストーリーを作り上げるまで討論を重ねた。20人ほどが会議室に集まり、草案が厚生省側からもいくつか出されたが、教育大の「k君」⁵¹のが採用され、みんなで補足することになり、大変な討論を経ながら、物語ができていった。たとえば、世界大恐慌下の日本。不景気になり、産業合理化による首切り・労働強化。夫は不安定な日雇い⁵²、やけ酒を飲むなど、とても気むずかしい。おとよは袋はりの内職（多い時は千枚⁵³）で共稼ぎ、子供三人。どうやって生活をささえたか。徳永直『太陽のない街』『はたらく一家』を参考に。神田の古本屋で資料集め⁵⁴、近所のおばさんから太平洋戦争時の新聞提供、民主主義科学者協会の人⁵⁵から米騒動の話を聴く。「見ることより作ることの方がとてもたのしい…製作中はうれしくて他の仕事まで大はりきりだった」「楽しかった製作中のことは私達の一生涯の思い出となるでしょう」。

問題点も挙げられている。4つの班（明治大正担当、昭和終戦以前、終戦以後、絵画）で分担したが、連携不足であった。「学生の考えと私たちの考えていたこととの間にひらきがあったのではないか。もっと討論する必要があった」「教育大の方におぶさってしまっていた」。

おとよが住んでいた深川の木場に写真を撮りに行き、おとよが売られていくときの承諾書を復元し、集団学童疎開では母子の手紙をつくる、米騒動をどう感じたか手記にする、関東大震災の絵を描く、どんな服を着ていたか。絵を描くのがとても大変だった⁵⁶。「みんなのちいさな創造をもちより一つ一つ母の歴史を作って行った」。文化祭の日が迫ると、勤めが終わった女子職員十数人が教育大学に来て毎晩遅くまで取り組み、なかには「友達の家泊まったことにして」徹夜するものまでいた。絵巻物製作に要した約六千円は、組合からのサークル補助金を三か月貯め、あとは歴史学研究会

⁵⁰ 自分達だけでなく、近所のおばさんたちにも書いてもらい、「集めに集めた」。

⁵¹ 確証はないが、この「k君」は黒羽ではないだろうか。

⁵² 日雇いは、不景気で首切りされたことによるものかは、わからない。

⁵³ 「千枚で何銭位か」、調べている。

⁵⁴ 神保町や本郷を歩いて、「足を棒にしながら」資料を探した。

⁵⁵ 黒羽の言によると、民科から「キャップ」として竹村民郎が「母の歴史」にかかわっていた。米騒動の話を聴いたのは、米騒動を研究していた竹村に間違いはないであろう。

⁵⁶ のちに黒羽が学習まんがにかかわったときにも共通する問題であった（「学習まんが『少年少女・日本の歴史』制作秘話『歴史教育ことはじめ』地歴社、1985年）。

の会費や、電車賃、お昼のパン代を節約して作った。文化祭前日、ほぼできあがった「母の歴史」を前にみんなで話し合う。「よくやったなあ」、みんなが同じ思い、それでも批判が出る。「社会的・政治的な事件が多すぎて、おとよさんの歴史がはっきり浮かび上がっていない」「これでは、おとよの苦しみが具体的にでていない」「仕事をひきうけて徹夜をする人がいる一方、新しくきた人の仕事がなかった、こういうやりかたではいけない」。

「文化祭の当日（10月23日）、ひえびえとした朝早く、とうとう、私たちの「母の歴史」ができた。…みんなうれしい」「出来たときはうれしくて涙がでてしまった」。⁵⁷ 遅く帰っても家族に叱られることはなく、「お父さんの歴史もつくれ」と言われたとの話に、「恋人の歴史をつくれば」の声が上がり、「みんながどっと笑いくずれる」。「みんながひとつのつよい輪につながっている」というたしかな感覚で教育大学から虎の門共済会館の会場まで「ものすごくかさばった絵巻物」を運んだ。

「母の歴史」そのもの⁵⁸の紹介は『歴史評論』9月号に発表すると予告されたが、結果的には掲載されなかった。したがって「母の歴史」の内容は詳細までは不明である。

『朝鮮ハンセン病史』注38にある写真を解読すると、本文は、『女は男に従属するもの』という考え方は、職場に家庭に根強くのこっています。」から始まっている。職場の文化祭に展示⁵⁹されて終わるのでなく、新読書社が全国で紹介したこともあり、各地で「母の歴史」の巡回展が行われた。茨城県下館では、主催者の予想をはるかに超える千名以上が見学して感想を述べ、主催者を力づけた。

さらに前述のように「母の歴史」にかかわった竹村民郎が、1956年11月、国民文化会議主催の第1回国民文化全国集会歴史分科会で「母の歴史」を展示し⁶⁰、厚生省母の歴史サークルによる絵巻物製作過程でメンバーの歴史意識がどのように変化し

⁵⁷ 「母の歴史」完成当日の朝の教育大学生5人・厚生省職員7人の笑顔がはじけた写真が滝尾英二『朝鮮ハンセン病史-日本植民地下の小鹿島』未来社、2001年、317頁に掲載されている。滝尾（東洋史専攻4年生）は後列中央、黒羽は後列左端。前列に主に女子職員、後列に主に男子学生が写っている。滝尾は、この書の「あとがき-「国民的歴史学運動」からの教訓のなかで」（313～320頁）で「母の歴史」（「国民的歴史学運動」）に言及し、石母田正からののはがきの写真も載せている（315頁）。

⁵⁸ 前掲『朝鮮ハンセン病史』316頁に「母の歴史」冒頭の写真が掲載されている。この写真から文化祭の日付がわかる。

⁵⁹ 前掲「座談会 職場歴史サークルの集い」の出席者（E）によると、展示するとき、「上の人」が戦争のときのことをあつたままに書いたところに、わらばん紙を貼って見せないようにしようとしたが、「私たちは憤慨して」その紙をはがして展示した。そのことで「赤といわれるようになった」。

⁶⁰ その後、絵巻物「母の歴史」がどうなったかは不明である。

たかについて報告させた⁶¹。この分科会に助言者として出席した鶴見俊輔は「母の歴史」から強い印象を受け、のちたびたび言及している⁶²。竹村によると、『母の歴史』の絵巻物製作は東亜紡績泊支部労働組合内の生活記録『母の歴史』⁶³をつくる運動に影響をあたえた。「母の歴史」は、「学者や専門家の書く現代史のたんなるアクセサリーなどではなく」「現代史の新しい方法論に重要な寄与をする民衆の創造活動の萌芽として一つの可能性をもつかもしい」と、竹村自身は高く評価していた⁶⁴。

「母の歴史」をつくる中で厚生省木曜会・教育大歴史学研究会も、「母の歴史」について、自ら総括している。「いくら今までの歴史学の成果を砕いて、やさしく話しても一向解決されない。それは、今までの歴史の内容そのものに⁶⁵、大きな欠陥がある様に思われる⁶⁶。職場の人達は、私達に新しい歴史の話を求めて来ているのである」、「職場の人達にとっては、『母の歴史』の中にこそ」「新しい歴史がある様に思われた。今までの社会の構造論とか、範疇論、或いは階級闘争讚美一点張りの歴史の話でなく、ほんとうに、働く人たちの生活を支え、戦いの武器になる様な歴史が『母の歴史』の中にある様に、考えられたのである」。「母の歴史」は「職場の人たちの気持と、要求に支えられた力を、原動力として出来上ったのである」と自負しながらも、「気持と要求を充分、みたしえたかどうか、その力が充分発揮出来たかどうかは」「疑問」、「新しい歴史であったかどうか」と謙虚である。「母の歴史」をつくることで、「自分達で考え自分達で仕事をしたいという気持が充たされ」、「延百人⁶⁷」が参加して、「大きな仕事をやりとげた」、「みんなでやれば出来るのだ」、「喜び」「生き甲斐を感じ」させる充実した時間であった⁶⁸。

⁶¹ 前掲「検証「国民のための歴史学」運動」『竹村民郎著作集V リベラリズムの経済構造』420・421頁。

⁶² 鶴見俊輔「伝記の新しい視角」『朝日新聞』1976年1月6日（『鶴見俊輔集12巻 読書回想』筑摩書房、1992年、収録）。黒羽はこれを読み、「驚き」「その晩は、よく眠れなかった」と吐露している（黒羽清隆『日本史の群像』三省堂選書、1977年、229頁）。網野善彦・鶴見俊輔『歴史の話』朝日文庫、2018年（初版2004年）、119頁。

⁶³ 木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出新書、1954年。

⁶⁴ 前掲「検証「国民のための歴史学」運動」『竹村民郎著作集V リベラリズムの経済構造』420頁。

⁶⁵ 学習テキストにした前掲『世界の歴史4 日本篇』を指すと思われる。

⁶⁶ 学んでいる歴史が、職場の人たちの生活とかけはなれていて、「現実の問題に結びついていない」、みんなの「要求に、合致していないのではないのか」との声が出されていた。

⁶⁷ 前掲「座談会 職場歴史サークルの集い」の「官庁サークル」（木曜会のこと）の出席者（イニシャルE）によると、「職場全体で六百人」中、木曜会の会員は「30人ぐらい」。

⁶⁸ 倉敷・前掲「女性史研究とオーラルヒストリー」。

本稿注 37 の研究会での「教育大生の報告に、はじめ「啓蒙」の立場で出かけたが職場の人々にかえて教えられ⁶⁹民衆の側からみた歴史と既成の概念的な公式論とははるかに質の違うことがわかったという言葉に、この二つのむすびつきから、新しい歴史が創りだされるのではないかという期待をもたせられた。「母の歴史」⁷⁰の主人公おとよの結婚について描くのに、「表面に現れない民衆の生活、闘い、そうしたものがお互いの討論のなかにてでくる。こうした民衆の歴史をもっとつきとめてゆかねばならない」⁷¹と、深く歴史をほりさげようとした。

黒羽は晩年、自ら「偏向的歴史教育の決定版」⁷²と称した「歴史教育から歴史学へ、ふたたび歴史教育へ」⁷³で「あらためて「国民的歴史学」運動の地平に立つ」を立項して、国民的歴史学運動を論じた。大串潤児は、黒羽の論考を「黒羽は、国民的歴史学運動を「歴史教育学の自覚なき誕生」として把握し、そのプラスの構造を、①学習主体の形成＝「自分史を学ぶ「私」のパスの充電・蓄積」と、②対象領域における民衆の発見、の相関性をおさえている」とまとめた⁷⁴。黒羽は、この項を、「歴史が子どもたちをつくり、子どもたちが歴史をつくる、この共生（共棲）関係の創出に、いま私たちは力をつくさなければならないのではないか」と締めくくっている。

前述したように、黒羽が卒業した後も、木曜会はしばらく活動を続け、教師になっても黒羽は木曜会に顔を出すことがあった⁷⁵。しかし1960年前後には会がどうなったかは不明である。「母の歴史」製作に参加した職員の名前が、「母の歴史」に言及する文献には記されていない⁷⁶。また、注 57 の写真に写っている「カヨちゃん」「ドンちゃん」「フミちゃん」の消息が分からないように、職員たちのその後の人生が伝えられる

⁶⁹ 「公式をあてはめ勝ちな学生に対して、職場の方たちは「ちがうわ、事実はこちらだ」との声。

⁷⁰ 今までの「母の歴史」の描き方やそれを裏返しのような英雄化した“母もの”描き方も上から「母」を見下している。と批判し、映画「太陽のない街」にあらわされたおばさんたちの力強さ、明るさを「母の歴史」にさぐってゆかねば、と話し合われた。

⁷¹ 井出・前掲「「母の歴史」をどうすすめるか」。

⁷² 黒羽の筆者あて書簡（前掲『黒羽清隆歴史教育論集』）。

⁷³ 北島万次・峰岸純夫編『歴史を学ぶこと教えること』東大出版会、1986年（前掲『黒羽清隆歴史教育論集』所収）。

⁷⁴ 大串・前掲「国民的歴史学運動の思想・序説」。大串は新稿「「国民的歴史学運動」論の切実さとは何か？」『部落問題研究』244号（2023年）でも黒羽論考に言及している。

⁷⁵ 前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD参照。

⁷⁶ 「母の歴史」に取り組んだ東亜紡織労働組合泊支部の場合は、女子労働者の文集であることから、筆者の名前が記されている（前掲『母の歴史』）。その後も、演劇や映画で取り上げられるなど脚光を浴び、生活記録も書き続け、その作品集も刊行されている（西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ』日本図書センター、2009年）。

こともない。

(2) 関西旅行にむけての予備研究の取り組み

1954年、東京教育大学史学科日本史専攻3年生が関西（奈良・京都）方面へ旅行に出かけた。20泊21日の「修学旅行」であった⁷⁷。この旅行にむけて、『民族の文化をもとめて⁷⁸ 教育大日本史学科⁷⁹関西旅行予備研究』⁸⁰と題する冊子（ガリ版印刷）が刊行された。「あとがき」に「一九五四年十月二十四日」の日付が記されている。したがって、この旅行がおこなわれたのは、これ以降である⁸¹。この冊子は、「あとがき」によると、日本史専攻3年生全員でつくられた⁸²。

黒羽は五人の編集委員の一人で、「まえがき」も書いている。その前半で月の輪古墳発掘を指導した和島誠一の「おばさんも中学生もみんなて掘れる方法を、あたらしくつくらねばならない。……月の輪古墳発掘ではそういう成果がえられている」の言葉を引用し、「民族のゆたかな文化はまだまだ国民みんなのものになっていない。歴史を学ぶぼくたちは、こんどの旅行をも含めて、民族の伝統と遺産をひろくふかく国民みんなのものにしてゆきたい」「そういう目標をもつぼくたちにとって、この本は、ささやかな、しかし、重要な里程標である」と、この冊子を意義付けた。月の輪古墳発掘、和島誠一の文章引用からわかるように、国民的歴史学運動のうねりの中での⁸³、関西旅行にむけての冊子づくりであった⁸⁴。

この冊子は、関西旅行で訪れる寺社や史跡について、参考文献を明記して、書かれ

⁷⁷ 黒羽は、日本近代史専攻でありながら、京都や奈良の庭園や寺院や仏像に関する文章を書くのは、ここに「原点」がある、とふりかえている（前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD）。

⁷⁸ 歴史学研究会は、1952年の大会のテーマに「民族の文化について」をかかげた。「民族の文化」について、歴史学界内外で関心が高まっていた（遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』岩波書店、1968年）。

⁷⁹ 正確には史学科日本史専攻。1952年入学生は20名、クラス担任は家永三郎であった（松永昌三『自由・民権・平和—日本近代史研究と私』慶應義塾大学出版会、2014年、572頁）。

⁸⁰ 以下、ここからの引用はいちいち注記しない。

⁸¹ 11月に正倉院展がおこなわれる奈良国立博物館も取り上げられているので、正倉院展見学もスケジュールに入っていたと思われる。

⁸² 「原稿をかいた人、ガリ切りをやった人、すった人、編集をやった人」、クラス全員が分担して取り組んだ。苗字などが記されていて、原稿を書いたのは、編集委員を含めて十名余と推測できる。松永（旧姓大呑）昌三も原稿（室生寺）を書いている。

⁸³ 「あとがき」に東京教育大学教員だけではなく、民科歴史部会（田中正俊・竹村民郎）にも謝意を表している。

⁸⁴ この冊子に、家永三郎・津田秀夫・竹田且の3人の東京教育大学教員が寄稿している。津田によると、「関西旅行」は毎年おこなわれていたようである。

ている。黒羽は東大寺を分担して、「東大寺覚え書」を書いた。名前は「くろはきよたか」⁸⁵、ひらがなである。「a. その歴史的背景」に6頁、「b. 各論的解説」は2頁、「c. 東大寺をどうみるかについて」1頁、「参考書」1頁をあてている。

参考書にあげているのは、他と共通する『国宝と史跡』『世界美術全集9巻』はもちろん、北山茂夫『万葉の世紀』、石母田正『中世的世界の形成』、石母田正ら『世界の歴史4—日本篇』、『日本歴史講座』所収の藤間生大・中井宗太郎論考、たかはししんいち『日本歴史物語』、亀井勝一郎『大和古寺風物誌』のほか八木隆一郎『大仏開眼シナリオ』⁸⁶までである。史料として『続日本紀』（国史大系）『万葉集』を引用している⁸⁷。

a. の書き出しは、不空羂索観音像であるが、東大寺領黒田庄を分析した石母田『中世的世界の形成』につなげているのは鮮やかである。「貴族やその親分の天皇にとっては不空羂索であったが、日本人民にとって不空掬取の意味をもっていた」と手厳しい。北山『万葉の世紀』によりながら、行基の動きを追うが、行基を非難する『続日本紀』の文を、現代の政治家の民衆への「不逞の輩」などのレッテルはりを「想いおこすことなしに読みえぬ」と、現代の問題と結びつけている。東大寺建立を、「単に「仏教史」「美術史」のなかにとじこめておけようか、よりすぐれて政治的に問題を理解する必要」がある、と政治と関連させてとらえようとした。「大仏が衆生済度のためにも民衆のためにもならぬ、支配階級の政策のうみだしたものである」と断じている。

c. は次の文で締めくくっている（注 P・Rセンター⁸⁸は米軍のための慰安施設）。

東大寺をつくりあげた民衆たちは、恨みと怒りのみをもってあの壮大な建物をみはしなかったろう。十ヶ年の歳月にわたる徭役のくるしみのこもっている、…自分らにとっては苦役の象徴である大仏を、かれらはやはり、自分らの創造物として見たであろう。結集された自分たちの力量の、壮大な所産としてうけとったであろう。それでこそ、僕らは、遠いわれわれの先祖のたぐい稀な遺産として、東大寺をうけとることができるのだ。そして…奈良の街をけがすP・Rセンターの存在に対しても、民族文化をまもれと叫ばねばならぬのだ。

⁸⁵ 黒羽が漢字の「黒羽清隆」を好まなかった。明治期の首相黒田清隆へのつよい嫌悪感があったことによる。のちに「黒羽清隆」が、「黒田清隆」と間違っ表記されたことがあり、それへの怒りを語っている（『黒羽清隆歴史教育論集』付属CDなど）。

⁸⁶ 1952年公開された映画『大仏開眼』（衣笠貞之助監督、長田秀雄原作）のシナリオ。c. で言及していた。

⁸⁷ 研究文献から孫引きするのではなく、きちんと原典に当たっている。黒羽の文章は、必ず原典に当たって、書かれている。

⁸⁸ P・Rセンター反対運動が奈良で起こっていた（前掲・大串「『国民的歴史学運動』論の切実さとは何か」参照）。

(3) 「ぼくらは悲しまねばならぬのか」を執筆

東京教育大学歴史学研究会⁸⁹は、1955年、機関誌『炬火』(ガリ版印刷)を創刊した。創刊号は、卒論特集⁹⁰で、阿南健一⁹¹「自由民権運動の研究をすすめよう」、田港朝昭⁹²「自由民権運動—大阪事件」、水野公寿⁹³「卒論の序の断章—いわゆる南北朝革命について」などが掲載されている。卒論の要旨を卒業生自ら1頁程の短文で紹介するものであった。この卒論要旨の前に「ぼくらは悲しまねばならぬのか」⁹⁴は掲載された。やはり名前は「くろはきよたか」ひらがなであった。

まず、大学の民俗学の研究旅行で、「信州南佐久の山村」を訪ねたときの体験を書き記す。70年前(1884年)の秩父事件の参謀長菊池貫平をかくまい、さらに逃がしたと、部落の有力者の「おじいさん」は「誇らしげに話した」。「貫平さん」という呼び名の記憶が伝えられ、さらに1928年『改造』にのった枯川・堺利彦「秩父騒動」をもってきてくれ、「堺利彦先生」とまで呼んでいた。「伝統がいきのこることは碑がたったりすることではない。いつもは地下水のように、そしてひとたびあふれ出れば激流となって」「碑などおしながしてしまう。それが伝統というものの性質ではないだろうか」と、「たたかひの伝統」を実感したことを語る。

次に、この文章の主題の羽鳥卓也⁹⁵への批判に移る。羽鳥が「民権運動家の「精神」」⁹⁶で、自由民権運動について、ブルジョア革命運動としての性格を否定し、共同体の支配者としての豪農が、藩閥政府の干渉を排除し、共同体の封鎖性をまもろうとしたのが民権運動であり、資本主義化を推進する藩閥政府に対して、豪農が地方分権を主張したのは、農本主義の立場からであり、民権運動の積極性を全く認めなかった。黒羽は、この羽鳥の「研究」に強く反発して、「ぼくらは悲しまねばならぬのか」を草した。羽鳥は、「豪農」と「藩閥政府」との、「上からの近代化の過程における抗争の問題にしまった」。「これでは日本には革命的伝統」「こんにちの平和と独立のための激しいたたかひにいかすべき革命的伝統をもたぬことになるであろう。ぼくらは悲しまねば

⁸⁹ 日本史専攻だけでなく、前述の滝尾のように東洋史専攻など他の史学科の学生も活動していた。

⁹⁰ 黒羽の1学年上の卒論特集である。

⁹¹ 阿南は、『歴史評論』61号(1954年11月)に「加波山まつり」に参加して」を寄稿した。

⁹² 田港は、沖縄出身、1967年黒羽が初めて沖縄を訪ねたときに、案内した(前掲『歴史教育ことはじめ』参照)。

⁹³ 水野は、前述の木曜会の歴史学習会に参加していた(「私の卒業論文—友よ、滅びた大学への挽歌として」『歴史教育と教科書問題』300頁)。

⁹⁴ 『炬火』5~8頁。ここからの引用はいちいち注記しない。

⁹⁵ 羽鳥は福島大学経済学部教員の経済学者。

⁹⁶ 『商学論集』20巻3号、1951年(『近世日本社会史研究』未来社、1954年、収録)。

ならぬのか」。

黒羽は、羽鳥の論稿を深く読み込んで、「素人読み手」と謙遜しながらも、「疑問」をあげていく。まず、「君民一致の実現のために君側の奸をのぞくという風に自由民権の政治的目標を把握し、そこからこの運動の性格をあきらめようとしたやり方への疑問である」。「君側の奸」を除くという指導層の観念的立脚点は、「運動の展開過程においてつきずされるものであり、そこからこの運動の性格規定をやることはきわめてあやうい」。「自由民権運動の思想史的・精神史的把握は、あくまでも運動の思想、たたかひの精神としてとらえられねばならない」。「月の輪古墳発掘のたたかひ」の「教訓を」「想起」すれば、「ひとつの時点においての」「分析」で「断定を」ひきだすのは、「たたかひの思想を解明するには」「危険なやりくちであるとぼくとして思う」。

豪農指導層の「精神」、志士意識、割拠性をクローズアップしたために貧農の激しい要求が運動をどう規定していったのかがほとんどかえりみられず、「あたかも指導層の精神における封建的要素が運動の全性格を決めているような論述の仕方に対してである」。「貧農たちの要求が民権運動とどう関わっているかがあきらかにされねば、民権運動の性格の把握はきわめて偏ったものになると考える」。民権運動家の「精神」の分析が直ちに民権運動の性格とされてしまうことにこの論稿のふくんでいるおおきな問題のひとつがある。

さらに、自由民権運動をなぜ藩閥=絶対主義政府が弾圧、圧殺したのか、という疑問に対して、羽鳥は、明治十五年岩倉具視の府県会中止意見書を取り上げ、民権運動の要求する自治が近代的地方自治とまったくちがう地方分権であっても、藩閥政府にとっては、自己の死命にもかかわる問題であり、ヨーロッパ流の「革命思想」と映じてもおかしくない、この論稿で答えたが、黒羽は、これをおしすすめると、地方自治に関しては、藩閥政府は「進歩的」、民権運動は「保守的」、「明治大政府、汝は自由民権運動よりも進歩的であったか！」ということになる訳である」と皮肉っている。「革命思想であるかのごとく映じた」とか「下からの近代化の幻想」とかの羽鳥の論は、「明治絶対主義政府にそのようなあまさをみとめること」になり黒羽は「承服でき」なかった。この文を次のように締めくくった。

羽鳥…の指摘する志士意識、愚民観、割拠性、政治的目標の封建性—それが前進するひとたちのひきづっている…ゆがみ、…残滓であり、道草をくい、…切株にころび、膝をすりむきながらもそれらを痛みをもってきりはなしてゆくたたかひの過程のなかでとらえられず、…論稿ぜんたいがきわめて「分析」的・静観的であること、…こういうのが「それ見たことか」「我意をえたり」というかたちで日本社会とその学問における反動勢力に歓迎される危惧をもつ。

(4) 卒業論文について

黒羽の卒業論文は「民主主義革命への思想史的序説—明治後期革新派における国家・天皇制論の側面的考察」(400字詰原稿用紙147枚)、1955年12月21日に脱稿された⁹⁷。家永を指導教官に黒羽を含めて8人⁹⁸が「近代思想研究会」で近代思想を共同研究⁹⁹する中で卒業論文に取り組んだ。

テーマは、はじめ、「明治後期における革新派イデオログと国体観念の相剋過程—木下尚江を頂点として」であった。木下尚江とは、山際圭司編『革命の序曲—木下尚江言論集』(創造社)¹⁰⁰で出会ったようである。上野図書館に通って、『週刊平民新聞』『毎日新聞』を読み続け、かなりの量の抄写ノートを取った(コピーはなかった)。そこでは主として幸徳秋水¹⁰¹らの論説を読んだが、平民社グループの「天皇制」論に違和感を覚えるようになった。さらに『六合雑誌』『直言』『国民之友』『日本人』などを読み、ノートを取り、自分なりの論理を築いていった。

1955年の秋には、構想ができ、執筆を始めた。それは次のようであった。

序章 問題提起の今日的意義について

第一章 明治国家社会主義の考察

第一節 福沢諭吉・「国民之友」におけるその萌芽

第二節 山路愛山「国家社会党」の思想史的考察

第二章 明治社会主義における国家論・天皇制論についての掌論

第三章 木下尚江における国家論・天皇制論の特質

第一節 「誤謬的・死物的・偶像的忠君思想」批判

第二節 市民精神と天皇制道徳—「忠良の臣民」は「奴隸的臣民」なり—

第三節 市民的國家観の完成

第四節 なにがこの思想家をうみだしたのか—尚江思想形成の原因についての小考察—

第五節 絶望の変貌

⁹⁷ 前掲「私の卒業論文」『歴史教育と教科書問題』297頁。

⁹⁸ 前掲「私の卒業論文」では「八人の友人たち」とあるが、黒羽を含めて八人である。以後、ここからの引用はいちいち注記しない。

⁹⁹ 後に中江兆民研究で有名になる松永昌三が「中江兆民の思想」を発表していたが、黒羽は「そのころの私は彼の構想を完全には理解できていなかった」と述懐している。

¹⁰⁰ 1955年2月25日刊行。2月25日は、奇しくも黒羽の誕生日であった。

¹⁰¹ 前述のように、高校時代に幸徳秋水について論じていた(前掲『日本史への招待』)。

終章 要約的に

卒論のタイトルは、イギリスの政治学者H・J・ラスキのことばにヒントをえた。第三章は、関東歴史学研究会協議会編『歴史研究』1号¹⁰²（ガリ版印刷、1956.5）に掲載された¹⁰³。卒論の主査は、和歌森太郎、副査は指導教官の家永三郎。

卒論提出の翌年の正月、和歌森宅に集まった黒羽の後輩の学生に、和歌森から「卒論」のなかに「威勢のいい」のがあり、とくに「序章」がそうだ、という話が出た。この「卒論」は黒羽である。黒羽が「序章」でまず論じたのは、小林多喜二の『蟹工船』不敬罪事件にふれつつ、中野重治が論じていた「日本近代の階級的解放運動において、治安維持法違反者にくらべて不敬罪該当者が相対的に少ないということ」の歴史的意義の重大さであった。第二章の「補論」で「明治の社会主義には天皇制批判がなかった」との山辺健太郎の評定¹⁰⁴を引用していた。

卒論の口頭試問で、和歌森から、福沢諭吉の「帝室論」における機能主義的な天皇制肯定論が「倫理的（内容的価値の実体）としての国体＝皇室の絶対性という、（正統派的）天皇制観」の「克服」となっているという黒羽の評価への疑問が出され、「帝室論」成立の時点では、「（正統派的）天皇制観」未確立なので、「克服」という黒羽の立論の前提がくずれていると強く批判された¹⁰⁵。

第三章は、木下尚江¹⁰⁶の国家論・天皇論の特質を分析している。「尚江の天皇制理念への批判は、徹底して人間論的・倫理的な風貌姿勢をとっている。現存支配秩序たる天皇制を歴史発展のなかに相対化してとらえ、「遺物的」「死物的」とする合理的認識態度の、そのさらに深層に」「市民的個人主義の結実がみられる」。「ここにこそ」「尚江的なるものの真骨頂がある」。「天皇制絶対主義の権力的・イデオロギー的強圧の下における近代的自我樹立の困難さと、それにも拘らずその必要について、尚江ほどの確に認識し情熱的に主張した思想家は明治思想史においてその類を見ない」。さらに「正統派社会主義的な国家論たる階級的國家論は」、「市民的國家規範論の」「継承発展のうえに構築されるべきであって、その点がぬけるならばそれはたやすく國家社会主

¹⁰² 編集にあたった古谷博によると、東京教育大学を訪れ、『歴史研究』に掲載するための優秀な卒論の推薦を依頼したところ、家永三郎が推薦したのが、黒羽の卒論であった。

¹⁰³ 黒羽清隆『増補版 日本史教育の理論と方法』（地歴社、1975年）に収録。

¹⁰⁴ 山辺健太郎「片山潜・幸徳秋水・堺利彦」『中央公論』806号（1955年11月）。

¹⁰⁵ 和歌森追悼文を特集した『史潮』新3号に、和歌森の史的天皇論への批判を含む「政治史における天皇—『天皇制の歴史的心理』をめぐる方法論的感想」を寄稿した（黒羽清隆『十五年戦争史序説』三省堂、1979年、310頁）。

¹⁰⁶ 黒羽は、終生、尚江への敬愛は、かわることはなかった。黒羽にとって、この卒業論文は、イデオロギー的・理念的「原点」であった（前掲『増補版 日本史教育の理論と方法』202頁）。

義」に墮するであろうと、のちの社会主義の歴史を予言するように鋭く指摘している。

Ⅲ. 新宿の中学教師になる

(1) 新任時代

黒羽は、1956年3月大学を卒業し、4月新宿区立東戸山中学¹⁰⁷に赴任した。のち、東戸山中学から寄稿を求められ、次のような文¹⁰⁸を書いている。

私の教えた社会科は、今にくらべるならば、はるかにはるかに貧しい知識内容しかもたなかったが、しかし、逆にこれだけが真実の社会科だという激しい確信によって武装されていた。…小さな本校舎で一年生に地理を教えて、それから用務員室の自転車にのり、明るい日ざしをからだにうけながら、原町小学校の「分教場」にゆく。まるでピクニックにゆくような楽しさが私の内部をみたして、つくつとすぐに二年生の歴史の授業にでる。その往復の日々私はたしかにしあわせをもつことができていた。生徒のみんなが私の授業を心待ちにしてくれていると信ずることが、私のしあわせをつくらせていた。…私は、生徒たちのことに夢中になれることが教師の必要条件だという信仰を身につけたのだった。…そのことから受けた恩恵は、どのようなはかりによっても計量できない。あの頃の木造校舎で、もう一度中学生に授業をしてみたいと願う心を否定できない。

黒羽にとって、この東戸山中学は、「青春¹⁰⁹の場所」というように教師人生の中でも特別であった。このような黒羽の思いは、当然生徒に伝わっていた。当時二年生で歴史の授業を受けた教え子たちに70年近くたっても、黒羽の授業の記憶がよく残っている¹¹⁰。新任での最初の授業が「隣組」の歌から始まった。歴史は身近なもので遠い過去の事ではないことを実感させるために、まず現代（戦争）の歴史を教えるという実験的な手法であった。そして倒叙法¹¹¹で原始社会（無土器文化）にもどって学習が

¹⁰⁷ 東戸山中学は開校2年目、校舎が未完成で、近くの小学校を間借りして授業がおこなわれるなど、学ぶ環境はよくなかった。

¹⁰⁸ 「青春の場所として」『あゆみ10周年記念号』東戸山中学（1965年2月4日）

¹⁰⁹ 加藤文三も、中学教師になって3年間で「青春時代」と回顧している（高田・前掲『戦後日本文化運動と歴史叙述』）。加藤が言うように「戦後教育の青春時代」でもあった。

¹¹⁰ 2023年11月6日、当時の2年4組の3人（男2人、女1人）に集まってもらい、黒羽の授業の思い出を語っていただいた。以下、これによる。

¹¹¹ 歴史教育における倒叙法は和歌森太郎が提言していた。のちに黒羽も和歌森らとの座談会で倒叙

すすめられた。「森の中の木の葉たち¹¹²」と題する黒羽が作成した史料集(ガリ版印刷)が授業で使われた¹¹³。夏休みの課題に、「お父さん、お母さんがどういう経験をしてきたか、聞いてきなさい」が出された¹¹⁴が、これを覚えていた方は、自分は提出できなかった、とのことであった。東京ではほとんど話題にあがらない、当時は教科書に記述されていなかった部落差別の歴史についても授業で取り上げた。「支配するもの、されるもの」との題で作文を書いたことがある。島原の乱について、図書館で調べた。授業中に歌舞伎の女形を演じてみせた。ロシアのボルガの舟歌とならぶ名曲、最上川舟歌を歌って聞かせた。発表間もない山崎豊子の「暖簾」¹¹⁵の読み聞かせをしてくれた。あきさせない、楽しい授業だった。

東戸山中学は、東京都の歴史教育の研究指定校で、カリキュラム・学習指導案作成、研究授業などで黒羽は鍛えられた。あとでふれる研究授業では、遠山茂樹・家永が指導助言者となっているが、ほかに上原専禄・野原四郎・和歌森太郎からも指導・助言を受けていた¹¹⁶。1957年1月24日、研究授業が行われた。クラスは2年4組、1時間のテーマは「秩父困民党物語」であった。この授業記録¹¹⁷が、『教育』71号(1957年4月)に掲載された。

同号には、同僚の寺沢正巳¹¹⁸と連名で執筆した「近代および現代史の取り扱いについて」も掲載されている。

単元「世界史の渦のなかでわが国の近代化はどのようになされたか」40時間。単元設置の理由「日本の近代化はどのような形で展開され、後進資本主義国民としての私たちの祖父母や両親はどのような課題を背負って生活してきたものであるかを学習する」。日本の近代社会を6つの時期に分ける。小単元「私たちのおじいさんやおばあさんはどのような歴史を生きてきたか」(明治期)「私たちのお父さんやお母さんはどのような歴史を生きてきたか」(大正・昭和期)。単元目標 [A 日本の近代社会を人権と多数国民の幸福という理念から考えさせる。B 近代日本のアジアにおける先進性はアジアを支配することによって保ち得るといふ後進資本主義の性格と結びついて

法にふれている(和歌森太郎・吉村徳蔵・黒羽清隆「新春鼎談 柳田国男と歴史教育」『歴史地理教育』246号、1976年1月)。

¹¹² 前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD。前掲「私の卒業論文」でも言及している。

¹¹³ 教え子の一人は、この史料集の最初の言葉をよく覚えていた。

¹¹⁴ これは、黒羽が大学時代に取り組んだ「母の歴史」的な課題であった。

¹¹⁵ 山崎豊子『暖簾』創元社、1957年。

¹¹⁶ 前掲「私の卒業論文」『歴史教育と教科書問題』305頁。

¹¹⁷ 黒羽の授業記録が掲載された事例はほかにはない。

¹¹⁸ 寺沢は地理専攻、のちに東京学芸大学付属高校でも同僚となる。

いたことを理解させる。C 国際社会の一員—アジア社会の一員としての民族道徳を養う。D 局地的な事件、断片的な情報、あるいはむかしの思い出として父兄の記憶にあるものなどから客観性のある歴史像を組み立てる構成力を養う]。

目標B・Cにあるように、近代日本の歩みをアジアとのかかわりでとらえようとさせている。たとえば「永い夜の始まり」で、日韓併合と台湾開発を学習する（日本の植民地経営としての朝鮮・台湾経営、朝鮮民族の運命を現象的物語的にふれる）。目標Dの父兄の記憶などから客観性のある歴史像を組み立てる構成力を養うは、大学時代の「母の歴史」をふまえている。世界恐慌後の「不景気と民衆の生活」で、グループ学習を取り入れ、父兄たちの思い出を中心として具体的なものを通して、農村の手ひどい恐慌の被害にふれる。「銃後に生きる国民」では、グループ学習で、国民の戦争参加の体験を父兄の思い出の中から探り出し組み立てる。

学習内容で、注目されるのは、明治維新で世直し一揆、「ええじゃないか」、「労働運動のあけぼの」で足尾鉍毒事件、明治の文化（4時間）で石川啄木の生涯（1時間）、「不景気と民衆の生活」で生活綴方運動、大東亜共栄圏の行方（太平洋戦争）で神風特攻隊である。学習形態では、グループ学習が16時間くまれている。日露戦争で模擬新聞発行、「日本資本主義成長の底に」で劇風に構成するまでである。プリントは、断定できないが、黒羽が作成した資料集（ガリ版刷り）か¹¹⁹。

前述のように、「秩父困民党物語」の研究授業がおこなわれた。生徒にグループ発表をさせた。秩父困民党は、「高利貸征伐」を目的にしていたが、「秩父は困民党のものにならなかった」¹²⁰、と板書して、生徒は次のように発表をつづけた。

地主は不景気のために地租・小作料を払えない農民に金を貸しました。とても高い利息で貸しました。農民は高い利息で苦しんで郡役所にそういう高い利息をやめてもらうように頼みましたが聞いてもらえませんでした。そこでとうとう高利貸征伐のためにたちあがったのです。

十月三十一日、困民党の農民のところをたずねた郵便配達が『明日から、秩父は困民党の天下になる』と言われて蜂起のことが知れわたった。困民党のひとたちは、竹槍・刀・猟銃などを武器としてたちあがった。かれらの目標とするところは、借金を年賦で返させてくれ、三年間だけ学校を休校してくれ、国会を開け、などです。借金を年賦で返させてくれというのは、借金を十年間は利息もなんにもつけずそのままにしておいて四十年でかえしてゆくんです。学校をなぜ休校するかというと、

¹¹⁹ この資料集は、黒羽の担当した授業だけではなく、ほかの教員の授業でも使われた（前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD）。

¹²⁰ 西野辰吉『秩父困民党』（講談社、1956年）のフレーズである。

義務教育になって学校へみんなゆくのは良いけれど、学用品やなんかのお金がかかって困るから休校してくと言うんです。

なぜ秩父が困民党のものにならなかったかということ、明治政府には陸軍も警察もあり、電話みたいな連絡も発達していたので、困民党は勝てなかったのです。

この発表に対して、生徒からは質問がでず、黒羽から質問する。「自由民権運動を最初に始めたのは?」「不平武士です」。はじめは「何をしてほしい運動だったんだ?」と問いかけ、「国会を開いてほしい」という答えを引き出す。「不平武士→国会開設運動」と板書する。本時の目標にも、「不平武士の反抗にその起点をもつ自由民権運動がその発展につれて、「世直し一揆」の線につらなる農民的政治運動に成長したことを捉えさせ、農民たちが、江戸期よりにないつづけてきた課題を、明治維新がどう本質的に解決したかを考えさせる。」とかかかっていたが、質疑応答で、家永三郎から不平「武士」は不平「士族」と教えるべきと指摘¹²¹を受け、黒羽も「誤謬」と認めた。北海道官有物払下げ事件が「なぜ…国会開設運動を余計さかんにしたんですか?」と、「とくに社会科的思考のすぐれて柔軟な生徒」に聞いて、「明治政府に税を納めてるんですから、その税の使いみちはみんなて相談するようにしなければいけない。だから国会を開けと言うんです。」と答えさせた。この税から地租について復習する。自由民権運動を「士族民権・豪農民権・農民民権」¹²²という「範疇展開序列的なもの」を把握させたいという意図があった。

質疑応答で、黒羽は自己評価として、「中学校でこのような教材を一時間かけてやることが妥当であるか」「一番懸念している」。「十分に討論・話し合いができていない。そこで結果としては教師が発問によってまとめる」「ところに問題があったのじゃないか」。都会の子どもに、「秩父困民党物語を取り扱う中で、例えば最低限、農村社会はどんなふうになっているのかということ、秩父困民党の時点で横に切ってみまして、一時間かけて明治の農村の姿をある程度描きだしたならば、その結果生徒は細かいことを覚えなくても農村の実体を、ある程度、感覚的にとらえることができるのではないか、そういう意図」をもっていた、と語っている。

まとめは次のふたつ。「A民権運動激化諸形態「敗北」のひとつの原因としての、自由党指導の欠如。及び明治政府の鎮圧力量の圧倒的優位。後者については、生徒発表でもふれている。「B前記のような民権運動の段階把握的な学習によって明治のムラムラのありさまを歴史的に（つまり農民のになっていた課題がやがて近代史全体のうちでつかめるように）まなぶこと。

¹²¹ 前掲『教育』71号、84頁。

¹²² 堀江英一『明治維新の社会構造』有斐閣、1954年。

「授業の現実とこれらの意図とのみじめな乖離については、物語的・放送ドラマ的方法のとりいれを必要だと考え、生徒を感覚的にこのテーマに凝集させることに力点をおくべきだという反省以外」にない、と厳しくふりかえっている。

(2) 担任として

黒羽は、新任時は、クラス担任はなく、1年の副担任で、前述のように、1年の地理(2クラス)と2年の歴史(2クラス)を教えた¹²³。2年目で担任をもつ(2年6組)。1958年3月、年度末にクラス雑誌『朝霧』をだした。それにある生徒が「黒羽先生への手紙」と題する文章を書いていた¹²⁴。若かりし黒羽の特徴を見事にとらえた“クロハ評”¹²⁵であった。

黒羽先生とは。(先生のくせ) …

○みんなを勉強熱心にさせました。○“ばかげた”ということばをよくつかいました。○号令台にあがると、額にななめにしわをよせて、こわい顔をしてとてもはつきり物を言います。○教室でしゃべる時は、朝礼の時より落着いていますが、激しく口をきくところは同じです。○笑うと子供みたいになることがあります。そのくせ、まじめな顔してむずかしい言葉を使ったりします。(この点が特に印象に残っていることです) ○ことばにおもしろい?アクセントをつけることがあります。○授業中ほとんど黒板を消したことがありません。○怒るときはたいてい「だめだぞ!」で済ましてくどくど言いません。○先生方の中では、黄色いチョークをよく使う点では一番ではないでしょうか。○授業中ではなくて、五、六人生徒が集まっている時など先生は、普通の友達のようなしゃべり方をすることがあります(若いせいでしょう)

1958年3月、黒羽が新任時に歴史を教えた東戸山中学1期生が卒業した。卒業アルバムに教員が餞の言葉を寄せ書きしているが、黒羽は「花ニ嵐ノタトエヲ知ルヤ/サヨナラダケガ人生ダ¹²⁶ 黒羽清隆」と書いた。新設3年目でようやく、校舎が完成した。

¹²³ 前の席で授業中よく寝ていた生徒から、朱肉をおせば「金印」そっくりの消しゴムをプレゼントされた思い出を語っている(前掲『歴史教育と教科書問題』12~14頁)。

¹²⁴ 黒羽清隆『文化史でまなぶ日本の歴史』地歴社、1981年、310・311頁。

¹²⁵ 前掲『文化史でまなぶ日本の歴史』310頁。

¹²⁶ 唐の漢詩を井伏鱒二が意識した言葉。前半は井伏によると「花ニ嵐ノタトエモアルゾ」、後半は太宰治が『人間失格』で、のちに寺山修司が引用して、人口に膾炙した。黒羽の好きな言葉で、よく著書にサインした。

生徒会誌『やまなみ』も創刊された。生徒の作品、クラスの紹介、教員・警備員の寄稿文、などが掲載されている。黒羽は、詩「森林原始」¹²⁷を寄稿した。黒羽は郷土研究部の顧問として、3年生の女子部員を指導し、「日本の子守唄」という作品が掲載されている。黒羽は「指導」とあるが、生徒との共同研究である。共同研究といっても、本文は黒羽が書いたようである¹²⁸。「子守唄」を、縦軸に地方別、横軸に「眠らせ唄」、「子供の愛憎」、「あこがれ」などの感情を表¹²⁹にして、統計的に調べた。この「子守唄」の研究は、大学時代の「母の歴史」の取り組みの延長上にあるとあっていいが、生徒との共同作品ということもあってか、のちの黒羽の著作で引用されたことはない。

黒羽が担任したクラスから、「読書について」と題するアンドレ・ジッド『狭き門』の感想文が掲載されている。クラスの紹介では、どこのクラスでもそうだが、長所・短所が率直に書かれている。長所は「勉強熱心なこと」で、先生が授業中まちがうとすぐに指摘する、授業が終わった後も質問攻めをする。弁当の時間は一番静かで、黒羽先生が言う「学校へくる目的である弁当の時間…」、「心の中をいちばんぴったり」形容していた。「わが担任の受け持つ社会科はさすがに静かで、せきばらいや、筆入れのふたをとる音を出すのものはずかしいほどである」¹³⁰。

このクラス紹介を担当した2年6組の生徒だった女性が、黒羽の追悼文¹³¹を書いている。それによると、黒羽は「東戸山中の悪童」¹³²と称していた。放課後のクラブ活動は女子ソフトボールを指導して、「バンカラ風」な印象を与えていた。

黒羽の魅力は何といっても授業だと、次のように述べている。「授業ごとに、黒板に授業内容を簡潔に表した題を大きく書かれました。すこしくせのある角を丸くした文字を黒板の左上にゆっくり吟味するように、調子をつけて手ばかりでなく、顔にまで表情をつけて書かれます。生徒はその先生の仕草にまず注目させられます。…板書した後、おもむろに話を切り出されます。いつのまにか引き込まれて、教室中がシーン

¹²⁷ 前掲『いまはけものたちのねむりのとき』(34～37頁)収録。

¹²⁸ 郷土研究部員として名前が載っているお一人から、本文を書いた覚えがないと伺った。

¹²⁹ 前掲『やまなみ』75頁。参考資料にあげられている北原白秋編『日本伝承童謡集成 子守唄篇』(国民図書刊行会、1947年)を生徒が調べて、表を作成させたのであろう。

¹³⁰ ほかのクラスでも、「授業中は社会科が一番静か」とある。

¹³¹ 田中雅子「黒羽先生の思い出」『クリオ』7号、1988年。『クリオ』は前述のクリオの会の機関誌。

¹³² 黒羽の話では、校長から言われた、とのことであった。黒羽は、校長を「おやじさん」と呼んでいた(前述の教え子による)。

と水を打ったようにな¹³³る。「心に残る授業」は、原爆¹³⁴の授業（峠三吉の「仮繻帯所にて」¹³⁵を感情こめて読まれた）、アウシュビッツ強制収容所の授業（写真集を見せられた）、被差別部落の授業（島崎藤村『破戒』の青年教師の話をされた）、このような、「生徒の心に訴えかけ深く考えさせる授業の他に」、元寇の授業では、「元寇」の歌¹³⁶の歌詞¹³⁷を板書して、歌唱指導した。課題を与えて、グループで調べ発表させることもあった。黒羽の担任以外のクラスで、夏休みの課題で、自作の歴史の問題集づくりにとりくみ、その成果が表れ、高得点をとった、と記憶している方もいる¹³⁸。

黒羽は、3年目は、学年は持ち上がりで3年5組を担当した。授業は、政経社分野を教えたが、とくに文章化はしていない。担任として、1学期の終わりに、『三の五通信』というクラス新聞（15頁）を出している（責任者は生徒名）。数編の生徒の作文、アンケート、編集委員による「一学期の反省」（率直にクラスの問題点（男子・女子それぞれ）をあげるとともに、より良いクラスにしていくための意見も書かれている）が掲載されている。

黒羽も生徒と一緒にアンケートに答えるとともに、詩「風景」・エッセイ「笑うということ―落語について」を寄稿している。アンケート「あなたのきれいなもの」に、「現実はその理論どおりにはゆかない」というひと、またそう考えるひと、「あなたのすきなもの」には、「白いキキョウ 森鷗外」と答えている。住所録もあり、黒羽は自宅の住所を記すとともに「八月十五日～二〇日 行方不明 放浪中」と書く。詩「風景」¹³⁹は、黒羽の学校時代に持っていた理科への苦手意識¹⁴⁰を率直に生徒に表白している。エッセイで「落語¹⁴¹がとても好きである」。古今亭志ん生、桂文楽、三遊亭円生、

¹³³ このような授業ができるのは、大学時代に演劇部で活動した体験があったからではないか、と演劇のプロに誤解を生じさせるほどであった。

¹³⁴ 黒羽が「原爆を許すまじ」を教え、原爆によって人の影が壁に残ったという話を記憶している教え子もいる（筆者宛田中雅子書簡による）。

¹³⁵ 前掲「家永三郎・黒羽清隆『史料を中心とした中学生の歴史』の検討」で指摘したように、この詩は、加藤文三らも教えていた。

¹³⁶ 1892年発表の軍歌。永井建子作詞・作曲。

¹³⁷ 「四百余州を挙（こぞ）る 十万余騎の敵……」。

¹³⁸ 狭間壮「黒羽先生と『私家版歴史問題集』」『中日新聞松本ホームサービス』2003年1月16日。

「授業は面白く、いろいろな工夫があつて、あきることがなかった。…黒羽先生は、…何事にも一所懸命だったのだと思う。そんな気合が生徒にも伝わってきた」。狭間（旧姓金城）は、東戸山中学の2代目の生徒会長を務めた。

¹³⁹ 前掲『けものたちはいまはねむりのとき』（40-41頁）に「蛾」のタイトルで収録。

¹⁴⁰ 物理が苦手で、そのことを講演でふれている（前掲『鉄砲足軽ひとりごと抄』）。

¹⁴¹ 「話の間というのが大事で、落語を聞くのはその勉強のためである」と生徒に語っていた（前掲

春風亭柳好、春風亭柳枝、「いずれも第一流の芸であろう。わたしはこれらを聞いていてあきることを知らない」。「落語の笑いというものは、非常に価値が高い」。近頃は寄席にゆくひまがなくなって、「残念である」。ちなみに黒羽のニックネームは、「シネマスコープ」であった。額が広がっていくのを感じて生徒がつけた¹⁴²。

(3) 新宿中教研『研究年報』に発表

1958年、黒羽は「現代史教育をめぐるひとつの観点—教授史料としての「枢密院重要議事覚書」一」を、『研究年報』6号(57～64頁)に発表する¹⁴³。

この年、道徳の時間が特設されるが、これと関連するはやりの道徳教育論への嫌悪が動機と記すことから、論を始める。中学校の日本近代史教育において、枢密院の正確な史的把握が欠くことができないとして、深井英五『枢密院重要議事覚書』(岩波書店、1953年)を史料として取り上げる。黒羽は、「イ、日独伊三国同盟問題」と、「ロ、太平洋戦争に対する政府、枢府首脳部の見通しについて」を検討している。ロで、1941年12月4日の東条英機首相の報告は、「恐ろしいほどの誤算」、「無責任の体系の真骨頂」と指摘し、「平易な文にすると教材となる」¹⁴⁴。

当時ひろくおこなわれていた「教師が、戦争経験ということ以外に何らの本質的準備研究をなさずに戦争を取り扱う態度ほど危険なものはない」と警鐘をならしている。黒羽は、戦争を「ファシズム対民主主義」とみる「善玉悪玉」史観をしりぞける。「中学生にとっての戦争史の理解には、支配者グループの立場、民衆の立場、自国の立場、相手国の立場などから多角的に考えさせることが必要であり、教師側でも」「史料の解読が要求される」が、史料の「研究が現場に欠けている」。この「覚書」を、太平洋戦争史史料として「必読文献」とすすめた。

黒羽は、歴史教師として、本を読むだけでなく、史料に直接あたって教材づくりをおこなった。これもその一例である。「戦争をあらゆる立場から、あらゆる角度からの光をあてててらしだしてみる態度をつくることこそ、最も重要な生活指導(「道徳」教育)だとぼくは思っているのだが…」で締めくくる。なお最後に(歴史学研究会¹⁴⁵会員)と肩書が記されている。

8月から9月にかけて黒羽が執筆に参加した『人物で学ぶ日本の歴史』(東洋館出版

「黒羽先生の思い出」。

¹⁴² 前掲「黒羽先生の思い出」。黒羽が映画をよく見ていたことを生徒は当然知っていた。

¹⁴³ 『研究年報』(当時ガリ版印刷)は、新宿区中学校教育研究会社会科部会が発行し、現在、新宿歴史博物館に所蔵されている。筆者名が「東戸山中 里村清隆」と間違っていて印刷されている。

¹⁴⁴ 前掲『史料を中心とした中学生の歴史』に史料として取り上げられ、さらに前掲『新講日本史』にも収録されている。

¹⁴⁵ 大学を卒業してすぐ、歴史学研究会に入会した(黒羽の直話)。

社)が刊行された。和歌森太郎が編集しているの、和歌森に執筆を誘われたのであろう。中学生向けに物語形式で人物が描かれている¹⁴⁶。黒羽は、支倉常長、平賀源内、高野長英、高杉晋作、景山英子¹⁴⁷、内村鑑三を執筆した。

同じ年、学習指導要領改訂案が発表され、これに対して黒羽は『月刊社会科』のしがきアンケートに答え、改訂社会に反対する黒羽の意見が10月号¹⁴⁸に、ほかの著名人らとともに掲載された¹⁴⁹。社会科にかかわる部分を紹介する¹⁵⁰。

「社会科」について言えば、たとえば「歴史」と「社会科歴史」との基本視角の差異点はどこにあるのかを、私たちが真剣に問いつめて、再確認、再定立すべき時であって、断じて「訣別」の時ではない。/非常にツツのない改定案全文(とくに中学二年)を通読してみて、その「差」を明示する論理的骨格を十分には感じとれず、改定案のシステムが、ここでは日本通史のプロットの体系性にたよりすぎているのではないかと思ったりした。/中学社会科という、教育における戦後の嫡流に、今こそ偏愛を注ぐべきであるのに、この改訂案中学二年の文章は「国史」「歴史」と仲が良すぎるように思われる。(思想内容が逆コース的だということではない。展開の方法論や視角に、社会科の独自性がうすいというのである)/全くの『例え』話として「社会科歴史」は、もっと民俗学などとしたしくなるべきだなどと思ったりしている¹⁵¹。

1959年、黒羽はつづけて『研究年報』7号(76~80頁)に「平民社グループに於ける『非戦』の論理—日ロ戦争期の平民新聞発禁事件をめぐって—」を発表した¹⁵²。このテーマについては、卒業論文¹⁵³を発展させたものだが、分析対象にしたのは、発禁処分を受けた『平民新聞』20号・52号の論説である。日露戦争という状況で「非戦論」の論理的前提として、自由民権論的天賦人權論を継承した市民的国家観を措定した史

¹⁴⁶ のちに『人物で学ぶ世界の歴史』2(東洋館出版社、1960年)にも、アウグスチヌス、グレゴリウス7世を執筆している。

¹⁴⁷ 景山英子については、のち改稿して『人物史でまなぶ日本の歴史』(地歴社、1980年)に収録。

¹⁴⁸ 前掲『黒羽清隆歴史教育論集』著作目録に、11月号とあるが、10月号の誤りである。

¹⁴⁹ 黒羽清隆「民主的変革への反措定」『月刊社会科』26号、41~42頁(1958年10月)。

¹⁵⁰ のちの「戦後の歴史教育を考える」(1965年)の論点がすでにあげられている(『日本史教育の理論と方法』地歴社、1972年、収録)。当時の歴史教育者協議会の批判とは全く異なる黒羽独自の批判であった。

¹⁵¹ この時点で、「民俗学としたしくなるべき」と民俗学に学ぶべきと述べているのは、興味深い。

¹⁵² 執筆したのは同僚のベテラン教師の「慇懃」による。

¹⁵³ 前掲「木下尚江における国家論・天皇制論に関する特質」参照。

的意義に着目し、「吾人が国家政府を組織する根本の目的理由」などといった幸徳の発想は、当時の思想状況にあつて貴重であつた、と高く評価した。平民社グループが、戦争は「仮令不可避でも悪事は悪事です。飽くまでこれを否認して其道徳を進めなければなりません」。「悪事は悪事」と言い切るところに「平民社グループ固有の光栄があつた」と意義づけた。

(4) 学習参考書の執筆

1958年、『中学2年社会の学習』¹⁵⁴が刊行された。阿部昭との共同執筆で、黒羽は日本史分野を、阿部は世界史分野を担当した。黒羽は教師3年目、24歳という若さであつた。基本・応用・整理・展開と4つに分け、応用は、対話形式など工夫している。展開は、入試などの問題なので、基本・応用・整理を検討する。

監修者の和歌森から、特にチェックをうけることがなかつたようである。そのこともあつてか、御成敗式目を「仮名混りのやさしい文章」と間違つた記述をしている¹⁵⁵（しかもゴチックで）。共産党についての記述がないのに、治安維持法について詳しく記述するなど、整合性がない。天皇にかかわる記述について、「承久の変」や「建武の中興」など保守的な歴史用語を使っている。女性史にかかわる記述が少ない。平安文化の「紫式部ものがたり」や北条政子の演説に少しふれる程度である。鎌倉時代、農民の成長と記述されているが、カナ書きの農民の訴えは記述されていない。幕末の「世直し一揆」「ええじゃないか」、朝鮮の独立運動である「3・1事件（万歳事件）」、日米安全保障条約の締結の記述がない。朝鮮民主主義人民共和国を朝鮮人民共和国と間違つている¹⁵⁶。

このように少なからず問題があつたものの、一方では類書にない記述が随所にあつた。元寇失敗の要因の一つに「元に征服された中国・高麗人の反乱・不満」をあげていた。当時、これを記述している教科書・参考書はなかつた¹⁵⁷。関東大震災で、「治安当局（警察や軍隊）が、暴動をおこしたという理由で無実の朝鮮人・労働組合幹部・社会主義者などをとらえ、社会運動や労働運動を弾圧し、たくさんの人々が官憲の手で殺された」と記述している。この記述では、殺された「たくさんの人々」が朝鮮人であり、また民衆が殺した史実をとらえにくくなっているが、ともかく取り上げている。戦争史の記述は評価できる。小見出しは、「日華事変」ではなく「日中戦争」と表

¹⁵⁴ 注11参照。

¹⁵⁵ 「武士の法律として仮名書きの貞永式目」（『歴史教育の教科課程』『歴史地理教育』17号、1956年3月）など、当時、よく間違つて教えられていた。加藤文三らの「歴史教育の資料と扱い方」『歴史地理教育』43号（1959年5月）でも話題になっていた。

¹⁵⁶ 前掲『史料を中心とした中学生の歴史』もこの問題点が踏襲されている。

¹⁵⁷ 前掲「歴史教育の教科課程」では指摘されている。

記。「政府（近衛文麿内閣）は不拡大方針をとると宣伝しながら」、「戦争をやめるための手をなにもうたず」と政府の責任を指摘し、「中国大陆侵略の戦争は、ほとんど強盗にも等しい野蛮な行動であって、南京の大虐殺（ゴチ）を始め、多くの中国民衆を殺傷した」と、指弾している。満州国を「ニセの独立国…満州は日本の植民地となった」。太平洋戦争の占領地域図のキャプションに「事実は日本の植民地支配の地域をしめすものであり、現地の資源はうばわれ、民衆は日本のためにこきつかわれた」と侵略の実態を書いている。小見出しが「8月15日の真昼（敗戦）」と「終戦」ではなく「敗戦」である。天皇のラジオ放送は、宮本百合子の『播州平野』の一節を紹介する。ただ沖縄について、「フィリピン・沖縄・サイパン島」を占領と年代順の記述になっていない（沖縄史の記述は欠落している）。原子爆弾投下については、原子爆弾の見出しの下、原爆の威力について、数字を示して具体的に述べるとともに、「アメリカが日本を降伏させたのだ」という事実をはっきりさせるため8月6日の時期をきめた」とおさえる。注目すべきは「原爆の図」¹⁵⁸ 第五部少年少女（図版）を掲載していることだ¹⁵⁹。「この図は日本民族が経験したもっともおそろしい経験をえがいた傑作。自分たちが原爆にあつて負傷し、家族に死なれた¹⁶⁰丸木位里・赤松俊子夫妻が平和への祈りをこめて筆をとった。図はその第5部で、働いていた少年少女の死をかいいたもの。」のキャプションがつけられている。

この『中学2年社会の学習』に掲載されている史料はいずれも現代語訳するなど生徒がわかりやすくしているが、邪馬台国、貧窮問答歌など万葉集の歌、枕草子、平家物語、堺についての宣教師の手紙、刀狩令、五ヶ条の御誓文などと少ない。シベリア出兵で堀田善衛『夜の森』を紹介しているのはユニークである。米騒動については、見出しをつけて、米騒動を伝える新聞記事（図版）を掲載し、詳述している。付録「新聞みだしにみる昭和史」¹⁶¹は興味深い。人工衛星の実験成功で本文は終わっているが、「輝かしい第1歩」だけでなく、「人工衛星が原爆投下のための武器として使用されたらどうなるか」と指摘するのは忘れない。下の結びのことばでしめくくっている。「日本は…独立国となった。しかし、わが祖国日本の世界における地位はまだまだひくい。私たちはきびしい努力によって、日本の国際的地位を高めなければならない。…国際連合の仲間になった日本は、軍隊のちからを強くすることによって昔のような地位を

¹⁵⁸ 「原爆の図」第1部は1950年に発表された（この第5部は1951年）。

¹⁵⁹ 中学社会の教科書に「原爆の図」が掲載されるようになるのは1970年代後半である（奥田博子『原爆の記憶』慶應義塾大学出版会、2010年）。

¹⁶⁰ 原爆にあつて負傷は、事実ではない。投下数日後に広島に入った。被爆した丸木の父親は翌年死亡している。

¹⁶¹ 出典はおもに『朝日新聞重要紙面の七十五年』（朝日新聞社、1954年）。

回復すべきなのか。それとも平和を守る運動にすぐれた仲間として加わることで祖国の地位を高めるべきだろうか。答は諸君の胸中にある！」。

1959年、『史料を中心とした中学生の歴史』¹⁶²（以下『中学生の歴史』と略記）が刊行された¹⁶³。家永との共著だが、黒羽が本文を執筆し、家永は赤ペンを入れてチェックした¹⁶⁴。同僚の寺沢と外間宏光（国語科）が協力している。全国学校図書館協議会に「それぞれの時代の史料を中心にして、その間のつなぎの形で歴史の流れを説明する。難解な史料は現代語訳して、中学生が抵抗なく読めるよう工夫されている。著者（黒羽氏）の現場の実践をもとに組立てられた書物で、解説もすぐれており、中学生向けの史料集としてもハンディな学習参考書としても最適である」¹⁶⁵と賞賛された黒羽25歳の作品である。『中学2年社会の学習』刊行に続いて、その翌年同じ出版社から上梓された。一部に、踏襲された記述がある。『中学2年社会の学習』は和歌森監修の『中学社会の学習』のシリーズの1冊¹⁶⁶であるが、『中学生の歴史』は単独である。

史料を現代語訳した中学社会の学習参考書の類例はなかった。史料は、『魏志倭人伝』からインドネシアの少年の作文まで114点、掲載されている。『魏志倭人伝』のような教科書に載る基本的な史料から、少年の作文まで多様である。史料の出典は、中学生の学習参考書であるので、明示していないが、推測できる。日本古典文学大系本、世界歴史事典¹⁶⁷、朝日新聞の記事¹⁶⁸などである。一般向けの本から孫引きするのではなく、史料にできるだけ直接あたっている。ユニークなのは、しばられる荘園農民たち（歎喜寺文書）¹⁶⁹、ある農家の家計簿（撰津国西成郡郡史）、ある旋盤工の家計簿（日本之下層社会）である。「エコノミイ（家計）の視点」を重視する黒羽¹⁷⁰ならではの史料の選択である。『中学生の歴史』刊行とほぼ同時期に、加藤文三らの「歴史教育の資料と扱い方」が『歴史地理教育』に連載されていた。それとの大きな違いは、文化史

¹⁶²家永三郎・黒羽清隆『史料を中心とした中学生の歴史』学生社、1959年。1971年、『中学生の歴史』と改題して刊行された。筆者は、これ（1973年版）を所蔵している。史料は、授業で使っていた「森の中の木の葉たち」（ガリ版刷り）という手製の史料集がもとになっている。

¹⁶³十五年戦争期の記述については、前掲「家永三郎・黒羽清隆『史料を中心とした中学生の歴史』の検討」で分析した。

¹⁶⁴前掲『黒羽清隆歴史教育論集』付属CD。

¹⁶⁵全国学校図書館協議会社会科学習資料解題編集委員会 編『社会科学習資料解題 中学校編』全国学校図書館協議会、1961年。160頁。

¹⁶⁶同僚の寺沢も『中学1年社会の学習』を執筆している。

¹⁶⁷『世界歴史事典 第22巻 史料篇 日本』平凡社、1955年。

¹⁶⁸前掲『朝日新聞の重要紙面七十五年』。

¹⁶⁹渡辺澄夫『畿内庄園の基礎構造』吉川弘文館、1956年。

¹⁷⁰前掲『増補版 日本史教育の理論と方法』40頁。

を取り上げていることである¹⁷¹。『中学2年社会の学習』のような御成敗式目に関する誤った記述はない。承久の乱、平塚明子(雷鳥)、日本共産党についても書かれている。関東大震災では、「なんの罪もない朝鮮人や社会主義者が、暴動をおこそうとしたという理由で殺される事件が発生した」と記述されている。

この書は、最後に「君たち日本の少年少女諸君が、このインドネシア少年の願いの実現のためにちからをつくす時、アジアはひとつのものとなるであろう。そして、その時、ほんとうの友情と団結が生まれる。」と、読者である中学生に希望を託して、格調高く、締めくくった。

おわりに

これまでほとんど取り上げられてこなかった1950年代の黒羽の実践、大学時代、東戸山中学時代について、ガリ版刷り刊行物、関係者の方への聞き取りなどを含め検討してきた。黒羽は、参加した国民的歴史学運動、「母の歴史」¹⁷²の体験から、「階級闘争讚美論」「公式的な既成の概念的な公式論」にとらわれることなく、教壇に立った。黒羽が教えたのは東京の新宿の中学生、高度経済成長前だったが、農村・農業の実態についてはほとんど知らない生徒だった¹⁷³。秩父困民党で1時間をとったのは、明治の農村の実態を、感覚的にでもとらえることができるのではないか、というねらいがあった¹⁷⁴。つねに生徒の意識を配慮しながら授業がおこなわれていた。黒羽自ら語るように、「国民的歴史学運動」の体験¹⁷⁵を、「中学校の教室にもちこんで」「中学生との日々に全力を傾注するようになっていった」。研究を深め、新宿中教研の「研究年報」に発表する一方、授業での経験をもとに、参考書を異例の若さで世に問うていった。黒羽を支えていたのは、学ぶ環境はけっして良好とはいえなかったが、「いい先生にはいい生徒がついて」きたとともに、「とても仲の良い」職場の仲間たちだった¹⁷⁶。家永

¹⁷¹ のち黒羽らが入って、文化史も含めて『増補版 歴史教育の資料と扱い方』(地歴社、1975年)が上梓された。

¹⁷² 喜安は「母の歴史」を「国民的歴史学運動の深層部分」において生まれた営為と評している(喜安・前掲『転成する歴史家たちの軌跡』94～95頁)。

¹⁷³ 「教室からお母さんへ」『東京新聞』11月14日。黒羽の文章では、ほぼ唯一地理の授業を話題にしている。『綴方風土記』(平凡社、1953年)を生徒に読ませたようである。

¹⁷⁴ 前掲『教育』71号、86～87頁。

¹⁷⁵ 黒羽は、自ら体験した「国民的歴史学運動」を、加藤文三らの「農村型」に対して「都市型」と語っていた(黒羽の直話による)。また、運動の中で、「反主流派・異端者扱い」された、と回想している(黒羽清隆『見つめられてこそ人は生きられる』大和出版、1983年、197頁)。

¹⁷⁶ 前掲「青春の場所として」参照。

や和歌森のような大学の恩師に恵まれたことはいうまでもないが、新しい学校づくりに熱心に取り組んでいた教員と生徒がいたからこそ、黒羽の思い切った実践ができたのではないだろうか。

謝辞 今回、聞き取りやお手紙でお答えくださり、資料を提供していただいた石飛仁さん、中村洋暉さん、本多賀代子さん、田中雅子さん、加藤正彦先生に、記して謝意を表します。

執筆目録（＊は月日不明、本論で言及以外は筆者未見）

1951年

- ＊ 紀行・雨の宇治にて（都立武蔵丘高校生徒会誌『武蔵丘』）
- ＊ 初期帝国議会の政治的諸事情（都立武蔵丘高校歴史部機関誌『史流』）
- ＊ 一思想家の生涯（幸徳秋水小伝）（『武蔵丘』）

1952年

- ＊ 谷崎潤一郎と女性（都立武蔵丘高校同窓会機関誌）
- ＊ 近代的自我の確立ということ（同上）

1953年

- ＊ 広重印象（東京教育大学日本史専攻クラス雑誌）

1954年

- ＊ 映画『女の園』について（厚生省歴史サークル機関紙『歴研ニュース』）
- ＊ 日本プロレタリア文学史覚書（厚生省歴史サークル研究会レジュメ）
- ＊ 激流をみちびくもの一親鸞の思想一（同上）
- ＊ 戦後派文学の思想（野間宏『顔の中の赤い月』をめぐって）（同上）
- ＊ 経済外強制について—スターリン理論をめぐって—（同上）

7月 “母の歴史”をつくる中で（『歴史評論』57）

10月 東大寺覚え書（教育大日本史学科関西旅行予備研究『民族の文化をもとめて』）

1955年

- ＊ ぼくらは悲しまねばならぬのか（東京教育大学歴研機関誌『炬火』創刊号）
- 12月 民主主義革命への思想史的序説（東京教育大学日本史学科卒業論文）

1956年

- 5月 木下尚江に於ける国家・天皇制論の特質（関東学生歴史学研究会協議会『歴史研究』1）
- ＊ ある社会科教師の生活と意見（厚生省歴史サークル機関誌『青い実』）

1957年

- 4月 近代および現代史の取り扱いについて（寺沢正巳と共同執筆）（『教育』71）
研究授業 秩父困民党物語 （同上）
質疑応答 研究授業にみる技術上の批評 カリキュラム構成の視点（同上）

1958年

- 3月 日本の子守唄（郷土研究部生徒との共同研究）（新宿区立東戸山中学校生徒会誌『やまなみ』1）
灯をめぐる記憶（1957年度東戸山中学2年6組クラス雑誌『朝霧』）
* 現代史教育をめぐるひとつの観点－教授史料としての「枢密院重要議事覚書」（新宿中教研『研究年報』6）
* カイヤットの眼・映画『眼には眼を』評（『青い実』）
* 紀行・雨の登呂にて（新宿中教研社会科部会巡検報告）
7月 『中学2年社会の学習』（和歌森太郎監修、阿部昭と共同執筆）学生社
笑うということ－落語について－（東戸山中学『三の五通信』）
8月 支倉常長 平賀源内 高野長英（『人物で学ぶ日本の歴史』3 東洋館出版社）
9月 高杉晋作 （『人物で学ぶ日本の歴史』4 東洋館出版社）
景山英子 内村鑑三 （『人物で学ぶ日本の歴史』5 東洋館出版社）
10月 民主的変革への反措定（全国社会科教育指導主事協議会『月刊社会科』26）

1959年

- * タチよ、がんばれ（東戸山中学映画教室通信『フィルムものがたり』）
* 平民社グループに於ける『非戦』の論理－日露戦争期の平民新聞発禁事件をめぐる－（新宿中教研『研究年報』7）
* シネスコ先生落書帳（1959年度東戸山中学1年1組クラス新聞『つくしんぼ』）
7月 （書評）滝川政次郎著『日本社会史』（『日本読書新聞』7月6日）
9月 安土桃山文化の特質（千利休を中心として）（『中学校社会科研究通信』13、学校図書）
10月 『史料を中心とした中学生の歴史』（家永三郎と共著）学生社
11月 教室からお母さんへ（『東京新聞』11月14日）
鷗外遺言状とその周辺－詩についてぼくの立場から（『べらんめえ』5）
12月 小林一茶に於ける「農民詩」の発見－詩についてぼくの立場から（『べらんめえ』6）